

## 【古代ギリシャの政治思想】

政治思想は、  
古代ギリシャ末期に活躍した  
ソクラテス、プラトン、アリストテレスらにより創始されたと考えられている。

ソクラテス (469 頃～399 B.C.)

↓彼は

人間の理想的な生き方は、  
知を愛し求めること (愛知=哲学) であり、  
そのためには、  
人々が自己の無知を自覚 (無知の知) することが重要と考えた。

↓そのため、

問答による対話を通じた実践教育を重視し、  
著作は残しておらず、  
最後は『若者を墮落させた罪』により処刑された。

↓但し

弟子であるプラトンが、  
処刑時のソクラテスの弁明を『ソクラテスの弁明』として著作に残しており、  
彼の思想は後世に伝えられている。

プラトン (427～347 B.C.)

↓彼は

◎感覚的世界 (目に見える現実世界) と  
◎イデア界 (永遠不変の真理の世界) を分けて考えた。

↓そして

イデア界の頂点にあるのが善のイデアであり、  
この善のイデアを認識できる者を哲人王と呼び、  
『哲人王が政治を行わなければならない』という  
哲人政治を唱えた。

↓また、

アカデメイアを創立⇒研究活動・後進の指導に当たった。

↓そこで育ったのが、

アリストテレスである。

※動物学、気象学、倫理学など幅広い分野の著作があるので『万学の祖』と呼ばれる。

※『ニコマコス倫理学』を著し、良い人間であるには知性的徳+倫理的徳が大事とする。

## 【絶対主義時代の思想】

中世ヨーロッパは（5～15世紀あたりまで）、  
地方貴族・教会が力を持つ群雄割拠の時代＝封建社会であった。

↓しかし、

◎貴族勢力の内紛

◎カトリック VS プロテスタントの宗教戦争等により社会は混迷を極め、

↓そうした中、

国王の権力基盤が強化され→中央集権国家が形成されていった。

↓この時代を

絶対主義時代（16～18世紀）という。

↓そして、

この混乱期の政治思想家として、

マキャヴェリ・ボダン・グロティウスが重要である。

N・マキャヴェリ（1469～1527）

↓彼は、

『祖国イタリアの政治的分裂による混乱』を目の当たりにし、  
徹底したリアリズム（現実主義）にたった。

↓そのため、

国家の安定には→強力な指導力をもつ君主（ローマ教会×）が必要と考え、  
政治から宗教を分離すべきとした。

↓そして、

著書『君主論』の中で、

- ・フォルトゥーナ（人間の力を超えたもの＝運命）
- ・ヴィルトゥ（人間の有能さ・意志力）

という2つの概念を想定し、

君主が自己の力量で運命を味方につけることの重要性を説いた。

↓そして

君主の持つべき力（ヴィルトゥ）の内容として、

- ①国民を操作し得るキツネの知恵（※道徳的に優れているように装うこと）
  - ②国民を畏服させるライオンの見せかけ
- が重要とする。

※君主は『愛されるよりも怖れられること』が重要。

↓その上で

権力維持には暴力が必要→常備軍（傭兵軍×）を編成すべきとした。

【国ⅡH21】○

政治的リーダーに求められる資質に関して、プラトンは、政治の目標である「善のアイデア」を認識し、政治の技能として「高貴な嘘」を駆使できる哲人王が政治的リーダーになるべきだとし、N. マキャヴェリは、国民を十分に操作し得る「狐の知恵」と国民を畏服させ得る「ライオンの見せかけ」とを兼ね備えた君主が国家の政治に当たる必要性を説いた。

【国ⅡH19】×

N. マキャヴェッリは、祖国であるイタリアの政治的分裂による混乱に直面した経験から、国家を安定させるには君主が強力な指導力を発揮することが必要であるとした。その一方で、イタリア統一の求心力をローマ教会に求め、君主といえども教会の権威には無条件に服することが必要であるとした。

【東京都H16】×

ボダンボダンは、君主には、道徳的に優れているように装うことと、愛されるよりも怖れられることが必要であるとし、「狐の狡知と獅子の力」をもつ君主を理想とした。

※マキャベリマキャベリの主張である。

【東京都】×

マキャヴェリは、ヴィルトゥ（力）によってフォルトゥーナ（運命）をまったく意のままに操ることができるような強力な君主像を抱いていた。

※彼の考えは、『力で運命を操る』のではなく、あくまでも『力で運命を味方につける』イメージである。